



光と影が交錯するインсталレーション作品。

古民家の窓ガラスから差し込む光、影の中に潜む黒い水と球体は、

鑑賞者のイドラ（先入観）に何を訴えかけたか。

ギシ、ギシ、と薄暗い階段を手探りで上っていく。指先には冷たくなめらかな壁の感触、足の裏には築70年といわれるこの家の、どこか懐かしい木の柔らかさを感じながら、仄かな明かりを目指す。そこで目にするのは一面の闇と、光の空間。

巨大な黒い球体が暗闇から迫る階下から一転して、2階には黒い水面が光を映して静かに広がっている。闇の淵に座り、巨大な水面にそっと触れてみる。わずかなさざ波から突如、光と闇が揺れ動き、みるみるうちにこの部屋の境界を歪

めていく。次々と生まれる波紋を映す壁面に光と闇が交ざり、融け合う。そしてまたゆっくりと黒い水面が張り詰める。微かな水音、時折、路地を歩く靴音。耳をすませば、遠くに聞こえるまちの喧騒。ふと、ここが民家の2階だというこ

とを思い出す。

千住の商店街のひとつ、本町センター商店街はいつも賑わっている。そこから小さな路地に入ると、古い家屋が立ち並ぶ静かな一角が現れる。そんな場所に「イドラノヤカタ」は存在した。この家は



イドラ（2012年10月27日—12月2日、イドラノヤカタ）

人、触れた人に問い合わせた。

制作、展示には地元の町長や前年度「Memorial Rebirth 千住いろは通り」を開催したいろは通り商店街の方、長年このまちでお店を営む人々、暮らしてきた人々の協力や支えがあった。彼らに誘われて、観客は数人ずつ会場に導かれ、音まちで唯一の無音の作品の中に座し、思い思いに水面を揺らがせて、それぞれの時の流れに身を委ねた。　〔佐々木愛理〕

長い間、空き家となっていたようで、あちこち綻び、壁や畳は荒んでいた。ボランティアチーム、ヤッチャイ隊、東京電機大学の学生たちの協力で、破れた障子の張り替え、畳の雑巾掛け、神棚の掃除……。埃まみれになりながらも、この家屋にもう一度、光がよみがえった。

「イドラ（idola）」とは哲学者フランシス・ペークン（1561-1626）が唱えた、人間が陥りやすい「偏見」や「先入観」の意味を表す言葉である。千住に現れた「イドラ」はこの言葉を可視化し、見た

やくしまるえつこ

Yakushimaru Etsuko

放送・時報／奉納朗読会

2012

花火放送、夕焼け放送、商店街放送、駅前ビジョン。

さまざまな日常の放送が、ある日突然やくしまるえつこの声に。

ヤッチャ場の歴史をもとに、やくしまるが新たな物語を紡いだ奉納朗読会も開催。



かつて都内最大級を誇った青物市場「ヤッチャ場」の鎮守・千住河原町稻荷神社境内の神楽殿にて、ヤッチャ場の歴史をもとにやくしまるが新たに紡いだ物語を即興で演奏、朗読した。

やくしまるえつこ「奉納朗読会」

(2012年11月25日、千住河原町稻荷神社、出演=やくしまるえつこ、大友良英、和田永 [Open Reel Ensemble]、山口元輝)

「ただいま、14時になりました。江戸から北への玄関口、宿場町通り・北千住サンロード商店街。長い歴史を持つこの商店街では、毎年街道祭りが開催されています。足立のまち情報スポット、「千住街の駅」にもぜひ立ち寄ってみてくださいね。いつも賑やか、宿場町通り・北千住サンロード商店街時報放送を、「音まち千住の縁」やくしまるえつこがお届けしました。あわてないあわてない、ひとやすみひとやすみ。」

定刻になると、5つの商店街へのヒアリングのもと集められた情報から、彼女が感じた各商店街のイメージや特徴が語られたアナウンスが流れた。

朗読も手がける音楽家・やくしまるの声の演出は、暮らしの中にただよう音にまぎれて、区内のさまざまな放送媒体か

ら電波となって、個人個人の何気なく利用している下校の道、商店街の空気自体に溶け込んでいく。夕方、区内で下校時に流れる「下校時安全放送」のナレーションは彼女の独特な声に変化していた。

店の売り込みの声、何気ない立ち話、車の行き交う音……。音に満たされたまちが、独特な存在感を放つ、柔らかい不思議な声に包み込まれた。

歴史が残す物語にちょっとした変化を起こし、意識させることで、まちの印象の中に歴史が浮き上がる。彼女の声によって千住のまちはいつの間にかジャックされた。

[西島慧子]

Drawing: やくしまるえつこ ©Yakushimaru Etsuko



やくしまるえつこ

(Another) Furniture Music —(別の)家具の音楽
2012

どこにでもある家具や家電そのものが、日常に溢れる音を鳴らし始めたとしたら。

『家具の音楽』(エリック・サティ作曲、1920年)を読み替え、

現代の千住の路地裏に、“別の”かたちで息づいた7品。



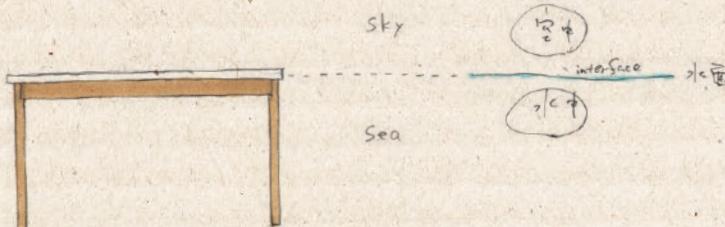
▲ The Forest of Senju

まちで採取した音が、引き出し一つひとつに。まちの音は、さながら木々や鳥たちのざわめきのよう

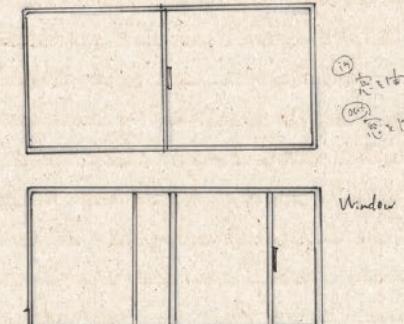


▼ The Sea Under The Table

空中で聴く音と、水中で聴く音の印象はまったく違う。海と空を分けるテーブルの天板の下に潜ると……

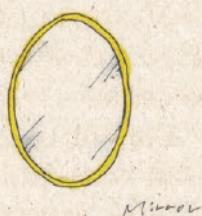


Rainy Day Music ▶
傘の持ち手にかかるヘッドホン。目を閉じて音を聴くと、まぶたの裏に雨の風景が浮かぶ



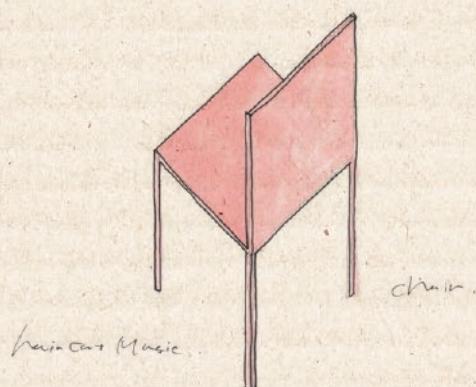
▲ Listen to the Window

窓を開けるとガラスに言葉が現れる。
外の音を内へ呼び込む



◀ Chair and Mirror

椅子に座ってヘッドホンをつけると、散髪のハサミの音が右へ左へ。あたかも髪を切られているような気持ちに



北千住駅から徒歩10分、宿場町通り商店街の裏路地にある、没個性的な一軒家を舞台に展示は行われた。ここで中心となった作品『The Forest of Senju』は、作家・八木良太が千住のまちを歩き、まちの中に溢れるさまざまな音を録音したものである。

ポップでカラフルなチェストの中には、フィールドワークを通して集められた大踏切の音、飲み屋横丁の喧噪、公園に響く子供の声、土手に吹く風のうなり、氷川神社の木々のざわめきなどが隠されていた。その音はすべて、作家が体験した千住というまちを凝縮しているようであった。鑑賞者が思い思いにチェストの引き出しを開けると、まちのさまざまな場所で収集された音が溢れ出した。

作品に変化した家具が奏でるまちの音は、耳を傾ける鑑賞者にさまざまな想像をもたらした。その時、鑑賞者が抱いたイメージは、音から想像して変化した、まちの新たな姿だったのではないだろうか。

[西野みなみ]

日本に暮らす外国人の生活に根ざした異文化を紹介・共有するプロジェクト。

外国人の経験やエピソードから得た物語を素材に、

日本人の疑問を加えて独自の作品が生まれた。

「国の匂い」について考えたことはあるだろうか。ある韓国人留学生は日本の匂いから、宇多田ヒカルを思い浮かべるという。「イミグレーション・ミュージアム・東京（IMM）」にはその発想から発展した、匂いをモチーフにした作品がある。外国人の人々は日本のいろいろな匂いを嗅いで、何を思い浮かべるだろう。異なる文化に暮らしていたからこそ気づく小さな違和感を独自の手法で展示した。

想像もできないような文化の融合は実は常に起きていて、我々が思う日常が非日常に変わるその境目は、とても近く、手の届くところにこっそりと秘められている。そんな気づきをもとに作品をつくりあげていくのが「IMM」だ。

このプロジェクトでは日本で暮らす外国人の生活や、言葉だけでは伝えきれない想いを、現代美術の手法を用いて表現する。美術家・岩井成昭の監修のもと、外国人の日本での経験を材料にした作品制作を行うのは、アーティストに限らない、一般の人々だ。

今回参加した人々は、大学生、会社員、ダンサーなど顔ぶれもさまざまである。地域に暮らす外国人へのリサーチとミーティングを何度も行い、写真・映像などの作品が少しづつつくり上げられた。参加者が持つさまざまな経験と、外国人との交流が結びつくことによって、観る者の新しい価値観の発見へつながっていく。

例えば、外国語を日本語に聞き間違え



左 上本竜平+カタノワ カテリナ「私の〈アイ〉ランド」
中 井出友実+鶴巻俊治+伴優香子「ブルースト現象@東京」
右 岡野勇仁+佐藤友梨+宮本一広「スカイ・イー」

てしまったり、その逆だったりといった「空耳」の経験が誰しも一度はあるだろう。今回はそうした聞き間違いと、同じ発音でも意味の違う外国の言葉を集めた映像作品も制作された。この作品『スカイ・イー』は観ていると、思わずニコリと微笑んでしまう。

そしてウクライナの女性が日本の日常生活で感じた「違和感」を写真で表現し

た作品では、ひとりの女性の目線を通して、文化によって異なる日常の捉え方が我々の目に映る。

IMMは、文化の違いをステレオタイプに分類するのではなく、個人個人の視点から、その奥底に潜む違和感をすくい上げる。それを可視化した世界は、我々にたくさん発見をもたらしてくれる。

〔金ピンナ、藤木美沙〕

未来楽器図書館

Future Musical Instrument Library

2012

柳原商店街振興会
柳原商店街振興会

私たちが活動拠点「音う風屋」にて二度に渡って開催された
体験型&発展型展示。
先鋭的な美術家や音楽家の作品も、地元作家や学生の作品も
すべてが等しく混じり合い響き合う音空間を創出した。



2013年 未来楽器図書館 (2013年10月27日—12月8日、音う風屋)

これまでどんな楽器に触れてきたらうか。「音まち千住の縁」の活動拠点である「音う風屋」を会場として二度に渡って試みた「未来楽器図書館」は、ほとんどの人が触れたことのなさそうな楽器を、実際に触って演奏し、楽しめる体験型展示だ。一度目は2012年「音まち千住の縁」秋のメイン会期に、音楽家だけでなく美術家やプログラマーを含む5名の個性溢れる作品が、土間と小上がりに雑魚寝するように同居した。足立智美が1994年からつくり始め、各方面のミュージシャンに絶大な人気を博していた『TOMOMIN』から出るファミコンのような懐かしい音色に、近くの大学生は夢中になってツマミをいじった。山本俊一による『PICnrome-ETH』が生み出す複雑なプログラムのパッドのまるでお餅でできたお菓子のような動き

を、近所のチビちゃんたちが食い入りながら不思議そうに見続ける姿も微笑ましい。ゆるやかな秋の休日が続いた。

そんな中でも、小日山拓也による多種多様な『お風呂樂器』は日々独自の進化を遂げていった。半分に切った2リットルのペットボトルの口の部分に、リコーダーの吹く部品(先端の方)を逆さまにはめ、さらにその先にビニールチューブをつける。そのビニールチューブの長さによって音程が変わるというごく簡単な仕掛け。この「湯笛」と呼ばれる樂器は、元豆腐店のこの場所に残る大釜に張った水に勢いよくつけると「ピー」という澄んだ素直な音が鳴る。会期中、連日訪れる人と小日山が一緒になって好きな音程の湯笛をつくり、「どうぞ自宅のお風呂で試してみてください」と案内すると、また





たく間に大ヒット！ 当初の目論みであった体験型展示の一歩先をゆく展開が思ひがけずできていった。

翌年、二度目の未来楽器図書館のコンセプトは、この小日山の「お風呂楽器」の成功を受けて、会期中に何度も足を運びたくなるように日々変化していく場とし、そして訪れた人がコミットできるような仕掛けをつくりたいと考えた。さらには、もうすぐなくなってしまうこの建物全体が楽器になるようにしたい。3組4名の参加作家にはその2点をオーダーした。

毛利悠子は、小型のモーターが回転する装置をたくさん持ち込み、それに「ノックちゃん」という名前を付けて貸し出すことで「万物には気持ちのよい音が鳴るツボがあり、それを探ってみよう！」という提案をしてくれた。木本圭祐は、彼が

3年以上にわたって研究してきた自作の弦楽器の機構を、50年後の千住と重ね合わせることで、自分の楽器にも未来の千住にも、新たな可能性が共鳴し合うような仕組みを、「音う風屋」の2階の6畳2間で2カ月以上をかけてつくってくれた。さらに、昨年に統いて参加している小日山拓也は盟友・江川次彦を招き入れ、どこにでもある「紙」のみを使って楽器の可能性を探ってくれた。それぞれの設置場所はすぐに決まったが、音には当然境界がない。互いの音が浸食し合うこの巨大な楽器と化した家の中で、さらに音を重ね合わせる演奏会を毎週行っていくことが千住ヤッチャイ大学の提案により決まった。

週替わりのコンダクターが独自のルールを設定し、この場所と共に存する。演奏に参加する者は自分の楽器を持ち込んで



も良いし、ここにある展示作品を奏でても良い。そもそも、その場にたまたま居合わせてしまった人も演奏者として参加できる入り自由な演奏会。私は、江川が会期中日々の変化の中で出した紙くずを漁り集め、パンチ穴でつくった小さな丸をお米のように研いだり、筒状の紙をタコウインナーのように切る行為にリズムをつけることで演奏会に参加した。

「未来楽器図書館」を訪れ、「未来楽器演奏会」に参加し、自宅へ帰れば、昔触れていた楽器を押し入れの奥から探し出すまでもなく、手近にあるどんなものも楽器に思えてくるだろう。

そう、「未来」は一握りのアーティストが提示してつくり出すものではなく、常に自分の中の閃きの続きをあるのだ。

[清宮陵一]

1 EY3『BONPUCASTRING』(2009)
カラフルにペイントされた自動車のボンネットが、天井からのワイヤーを叩くことでギターのボディのように共鳴する。

2 山本俊一『PICnome - ETH』(2012)
生命の誕生、進化、淘汰のプロセスを再現した「ライフゲーム」プログラムをパッドにインストール。

3 江川次彦+小日山拓也『PAPIER MUSIK』(2013)
「紙だけどれだけ楽器をつくることが可能か」という問いに、盟友二人がそれぞれ挑む。

4 小日山拓也『お風呂楽器』(2012)
野村誠ふろデュース「風呂フェッショナルなコンサート」(2012年3月)から生まれた、お風呂で鳴らせる耐水創作楽器。写真は携帯湯笛、風呂ンボーン、和湯笛。

5 毛利悠子『small knocking』(2013)
たくさん小型振動モーターを中央制御装置がコントロクト。小さなかさけき音の気配。

6 足立智美『TOMOMIN』(1994-)
タッパーを入った、オリジナルのミニ・シンセサイザー。「音う風屋」には新旧3点を展示。

7 木本圭祐『Drone』『-fication』(2013)
電磁誘導によって無限に鳴り続けるアコースティック弦楽器。12のハーモニーが和室を包む。

8 八木良太『RE-MOTE CONTROL』(2010)
家庭用リモコンを赤外線パネルに向けてスイッチオン！ リモコンはオリジナリティ溢れる音を発する。



4

5

6



7

8

2013

千住に住んでいる人も通っている人も通過している人も。

たくさんの千住っ子から親しまれているあの場所がライブ空間に突如変身。

昭和の香り漂う「千住ミュージックホール」にようこと！



第1回 Knock「純★音楽会」
(2013年11月15日、ライブハウス「Knock」北千住)

私は千住で生まれ、千住で育ったいわゆる地元民である。誰もが生まれ育った地元を愛していると思うが、私も千住を強烈に愛している。しかしひつだけ物足りなく感じているものがあった。それは、音楽を聞くことである。千住が音楽の溢れるまちになれば、どんなにうれしいかと妄想していたところに「音まち千住の縁」を知った。社会人ボランティアとして参加した実験的コンサートや創作楽器の展示……。妄想が現実となり、みるみる夢中になっていった。そんな中、

第2回「ADACHI HIPHOP PROJECT RETURNS!」
(2013年12月15日、野口ボクシングジム)

「音まち」で初めて開催された“普通の音楽ライブ”である「千住ミュージックホール」に参加した。
第1回の舞台は、数多くの地元ミュージシャンを育んできたライブハウス「Knock」北千住。正直まったく想像もつかない組み合わせだったが、その中でも遠藤賢司がとにかくすごかった。ギターとハーモニカと歌のみで爆音を鳴らす。爆音なのに心地良い。あまりに心地よくて時間感覚が狂ってしまい、ふと気づいたらいつの間にか終演していた。

第3回 サンローゼ「魅惑の駅前歌謡ショー」
(2014年2月2日、喫茶室サンローゼ)

野口ボクシングジムで開催された第2回は、ヒップホップとボクシングジムという強烈な組み合わせ。サンドバッグやミットがあれば、それでリズムを刻まない訳にはいかない。プロボクサーのミット打ちのリズムに合わせ、環ROYがラップするさまは、まるで映画のワンシーンのようだった。

そして第3回の舞台は千住が誇る東口駅前の喫茶室サンローゼだ。千住で1、2を争う「昭和なマッタリ空間」が、「深夜のワイドショー的空間」に変貌した。足

第4回 日の出町団地 8days LIVE & TALK
「New frontiers of world's traditional music」
(2014年2月15～23日 日の出町団地スタジオ)

立区ディープスポットトークショー→足立区発ディープ演歌→歌十タブラボンゴ+ユルフワ寸劇……。この感覚はやはり「毎度おなじみ流浪の～」で有名なバラエティ番組「タモリ倶楽部」の感じそのものだった。

仕事を終えライブに向かうとき、こんなにワクワクしながら千住に戻るのは初めてだった。そしてライブ終演後、ボーッとしつつライブについて友人と語り合ひ、我がまちを歩くのも初めてだった。

[伊原修太郎(ヤッチャイ隊)]

まちで活動する多様な立場の人々をゲストに招くトークシリーズ。

現場で生まれたさまざまな問い合わせテーマに、

参加者とともに新たな“まちづくり”について語り合った。

音う風屋前にて、「音まち千住の縁」事務局とヤッチャイ隊メンバー

「音まち千住の縁（音まち）」の活動を始めてから、私たちはアーティストとともに、まちにいろいろなアプローチを試してきた。そんな日々のプロジェクトの現場で生まれた「問い合わせ」を、ゲストとともに「音まち」に関わるみんなで学び、語り合うための場として始めたのが「音まちトーク」である。

2012年11月の「音まちトークねほりはほりスペシャル」では、日常編集家・音楽家のアサダワタルとグラフィックデザイナーの大原大次郎を招いた。全国各地でジャンル横断的な活動を展開する二人のトークは、それぞれの専門性に応じた内容の濃いものでありながら、コミュ

ニケーションのあり方に着目している点で似ていた。それは、これまでにない新しい縁をつないでいくことを目的のひとつにしている「音まち」の活動ともつながる。

中でも特に印象的だったのは、「面倒をいったん引き受ける」ことによって、その場に創造的なコミュニケーションの回路を開こうとするいくつもの実践だった。例えば、旅行では誰もがすぐに写真を撮る。後で話をするとき、言葉で説明するよりも、旅先で撮った写真や動画を見せる方がずっと情報量が多く簡単に伝えることができるからだ。しかし、旅に

「今回は撮影はNG」というたったひとつの「面倒なルール」を設けるだけで、伝えるためのたくさんの対話と表現が生まれ、コミュニケーションを誘発し、旅の質もまったく違ったものになるという。

空から音を降らすオーケストラ、だじゅれと音楽の新しい表現、地域の踊り手たちまで巻き込んだメモリアル・リバース。どれも一筋縄ではいかず、ある種の「面倒」はどの企画にもあっただろう。そうした面倒を引き受けて、プロジェクトに関わってくれた仲間が、千住に縁もゆかりもなかった私たちをまちに引き入れてくれた。ふと気がつけば、忘年会には

60名以上の人人が参加してくれるまでになった。このプロジェクトが何をしようとしているのか、明確な画や言葉を提示することはまだできないが、関わる一人ひとりの顔が、このプロジェクトの表情をかたちづくっている。

実るものも見えるものも、関わる人それぞれに違うだろう。「音まちトーク」は、イベントが持つ熱気とは異なる、じわじわとした熱を人々に伝えていく場所。そしてそれの実りを交換し合い、まだ見ぬ新しい場づくりへの種を巻き続ける場所でありたいと思う。

[神谷知里]

Program Officer's Message

本書へ寄せて

本書は、「音」をテーマにしたアートプロジェクト「アートアクセスあだち 音まち 千住の縁」の2011年度から2013年度までの活動ドキュメントです。これまで取り組んできた10を超えるプログラムで何を試みたのか、アーティストと協働した運営スタッフの視点で振り返ったほか、貴重な視座からの寄稿もいただき、3年間のエッセンスが凝縮された一冊になりました。

「音まち」は、魚市場や銭湯などあらゆる場に刺激を受け、音をめぐる実践を重ねてきました。私が担当として本プロジェクトに加わった2012年は、ちょうど作曲家ジョン・ケージ生誕100年の年。日常の中の音にも耳を向け、「聴く」ことの深みを見つけた彼は、同時代の仲間とともに音楽の新たな地平を拓くきっかけをつくりました。私たちもまた、まちに内在するさまざまな「音」に出会いながら、21世紀の冒険に乗り出しているのかもしれません。

そんな手探りの試みを日々ともにし、果敢に「音まち」の運営を担うみなさまと出会えたことを嬉しく思います。主催としてタッグを組んできたNPO法人やるネの桑田智紀理事長、足立区シティプロモーション課のみなさま、日頃より本事業に理解を示してご協力いただいた東京藝術大学の植田克己音楽学部長に御礼申し上げるとともに、これまで関わってくださった多くの方々、そして千住のまちに心から感謝いたします。

無数の人とのコラボレーションによって成り立っている「音まち」を支えたみなさまにとって、本書が大きな名刺代わりとなって、新たな出会いを媒介してくれる事を願っています。

長尾聰子 ながお・さとこ

[東京アートポイント計画 プログラムオフィサー]

Producer's Message

ADACHIへの想いを託して

熊倉純子 くまくら・すみこ

[「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」プロデューサー／東京藝術大学]

お世話になったみなさま、本当にありがとうございました！

みなさまに叱られながらも、少しずつまちに沁みこんでいるよう、大好きな地元ラッパー・問題児の詩に想いを託します。

「音まち千住の縁」まだまだ続きます！



確かに見た目は物騒
でも生まれてきたこの街はhood
root4から重なりあう318
密集住宅街は迷路
紙一重のheroと貧乏
駒送りにシンクロするインスト
五感はfiveからsixにmix
同じ場所を歩むforce1のkicks
時間をかけて起こすジングルズ
スケーターはsimpleにかますkick flip
トンネルにはタギングやスラング
頑張り屋は集う舎人か鹿浜パンク
影を作り出す外灯のlamp
what's up?で始まる対等のラップ
路地裏は暗くもてなすブランツ
そこにはいろいろな喜怒哀楽
生まれも育ちも我が町足立
二足のワラジで振り落とすシガラミ
人相わりいけど温ったけえ下町
渡る世間は鬼ばかり

福は外鬼は内
まだ未完成の開拓地
脳たりんのヤンキーにジャンキー
やけにある入り乱れた閉地
コンビニよりありそうラブホ
塵も積もった溢れるdust
Pusher, bitch, ヘッズにポーポー
活動は主に夜行動
首都高速荒川river
少し足運べば埼玉千葉
週末には騒ぎ出す溜まり場
異なったカルチャーが混じりあう
The same routing東京メトロ
今も変わらない西新井station
精出すbusiness汚れるシューレス
解決出来ない事件は終結
生まれも育ちも我が町足立
二足のワラジで振り落とすシガラミ
人相わりいけど温ったけえ下町
渡る世間は鬼ばかり

風を切り浴びる直射日光
集団コール切る族車日影
行くとこないしいつめ同じ
一文無しで一網打尽
プレスしたストレスは捨てる
哀愁漂わす情けはflesh
visionはざれる夕日は暮れる
愛着わいたこの街のsmell
生まれも育ちも我が町足立
二足のワラジで振り落とすシガラミ
人相わりいけど温ったけえ下町
渡る世間は鬼ばかり

〔街並み〕
lyric by 問題児
[ADACHI HIPHOP PROJECT]

写真協力：遠藤一郎

大友良英

1959年生まれ。即興演奏家として世界各地で活動するほか、映画やテレビなど映像作品の音楽を多数手がける。近年は多種多様な人とのコラボレーションを軸に展開する音楽作品や特殊形態のコンサートを手がける。東日本大震災を受け、自らが暮らした福島にて「プロジェクトFUKUSHIMA!」を主催。

大卷伸嗣

1971年岐阜県生まれ、東京都在住。アーティスト。作品『ECHO』『Liminal Air』など展示空間を非日常的な世界に生まれ変わらせ、鑑賞者の身体的な感覚を呼び覚ます、ダイナミックなインスタレーション作品を発表している。東京藝術大学美術学部彫刻科准教授。

野村誠

作曲家、ピアニスト、鍵盤ハーモニカ奏者。主な作品に「動物との音楽」「老人ホーム・REMIX」「プールの音乐会」「野村誠×北斎」「Physical Pianist」など。NHK教育テレビ「あいのて」番組監修。著書に『音楽づくりのヒント』(音楽之友社、2010年)、共著書に『即興演奏ってどうやるの』(あおぞら音楽社、2004年)ほか。

足立智美

1972年生まれ。パフォーマー、作曲家。現代音楽の演奏や作曲、音響詩や即興音楽、サウンド・インスタレーションの制作、楽器の創作など幅広い領域で活動。坂田明、高橋悠治、一柳慧、五世常磐津文字兵衛、伊藤キム、猫ひろしらと共に演。テート・モダン(イギリス)、ポンピドゥー・センター(フランス)など世界各地で公演。

スプツニ子！

1985年東京都生まれ、ボストン在住。アーティスト。テクノロジーによって変化していく人間の在り方や社会を反映させた映像、音楽、デバイス、写真、パフォーマンス作品を制作。2013年、マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボ助教に就任し Design Fictions Group をスタート。

ASA-CHANG

福島県いわき市出身。東京スカラダイスオーケストラ創始者。スカラ脱退後はドラマ&バーカッショニストとして多数の有名アーティストのレコーディング、ライブに参加。自身のユニット「ASA-CHANG&巡礼」で海外で高い評価を得るなど打楽器奏者として国内外で活躍。

やくしまるえつこ

音楽家。「相対性理論」「やくしまるえつことd.v.d」など数多くのプロジェクトを手がけるほか、ドローイングやイラストなど絵画作品の評価も高く、楽曲提供、朗読、ナレーション、CM音楽と多岐に渡る活動を行う。縦横無尽な活躍は音楽の枠組みを更新し続け、大反響を呼んでいる。

八木良太

1980年愛媛県生まれ、京都府在住。アーティスト。音響作品をはじめとしたオブジェや映像、インスタレーションまで、多様な表現手法を用い、音や文字、時間を題材に制作を行う。モノの機能や属性を読み替え、再構成して関係性や価値を反転させたり、経験や記憶を新たなコンテキストで再生させる。

岩井成昭

美術家。イミグレーション・ミュージアム・東京主宰。1990年より国内、欧州、豪州、東南アジアの特定コミュニティの調査をもとに、映像、音響、テキストなどを複合的に使用した視覚表現を展開。近年はワークショップや、多文化研究活動を並行して実施中。秋田公立美術大学教授、東京藝術大学非常勤講師。

アートアクセスあだち 音まち千住の縁

主催 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財團法人東京都歴史文化財団)、東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるネ、足立区

プロデューサー=熊倉純子[東京藝術大学音楽学部音響環境創造科]

ディレクター=清宮陵一

事務局長=神谷知里

事務局=岸本友恵、胡舟ヒロミ、佐々木愛理、椎名有紀子、處美野、

中島裕美、南雲由子、橋本英史、東聰子、西島慧子、西野みなみ、三宅博子

東京藝術大学音楽環境創造科熊倉純子研究室=長津結一郎、宮下信子、エレナ・ブジョラ、鄭タシイ、金ビンナ、丸田実季、松浦史子、等麻理子、石橋鼓太郎、中村久仁子、的場昂樹、川添咲、藤木美沙

アートディレクター=濱祐斗[YUTO HAMA DESIGN]

東京文化発信プロジェクト室=森司[東京アートポイント計画 ディレクター]、

大内伸輔、長尾聰子[東京アートポイント計画 プログラムオフィサー]

特定非営利活動法人やるネ=桑田智紀[理事長]

足立区シティプロモーション課=根岸彰雄、神保義博、細谷宏、舟橋左斗子、秋谷祐行、渡辺孝明

アートアクセスあだち 音まち千住の縁 2011-2013 ドキュメント

発行日 平成26(2014)年3月28日

監修=熊倉純子

編集=清宮陵一、松浦史子、東聰子、宮下信子、神谷知里

編集協力=佐藤惠美、柘植馨

デザイン=濱祐斗・山口真生[YUTO HAMA DESIGN]

写真=赤羽佑樹、雨宮透貴、大塚歩、河島達太郎、高島圭史、日吉永遠、森孝介

印刷=株式会社アイワード

発行 東京文化発信プロジェクト室(公益財團法人東京都歴史文化財団)

〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階

TEL: 03-5638-8800 / FAX: 03-5638-8811 / E-mail: info-ap@bh-project.jp

www.bh-project.jp

[本書に関するお問い合わせ先]

アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局

〒120-0034 東京都足立区千住5-13-5 学びビア21 7階

TEL: 03-6806-1740 (13時—18時、火曜・木曜除く)

E-mail: info@aaa-senju.com

<http://aaa-senju.com>

2014 ©東京文化発信プロジェクト室

All right reserved

Printed in Japan

本事業は、「東京アートポイント計画」の一環として実施されました。

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、

東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、

「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財團法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。